

星空と路「中野伝承プロジェクト『日和山と中野小太鼓』」上映会アフタートーク

開催日時：2021年3月13日 13:30-15:10

話し手：増田芳雄、村上幸一（なかの伝承の丘保存会）

進行：佐藤友理（せんだいメディアテーク）

佐藤：今日は「なかの伝承の丘保存会」のメンバーであり、その中で「中野伝承プロジェクト」を立ち上げたおふたりをお呼びしています。

仙台市宮城野区にあった中野小学校は、津波により甚大な被害に遭いました。震災後、中野小学校区は災害危険区域に指定されたため、住民の方々は長年住み慣れた土地を離れ、他の地域に移らざるを得なくなりました。人が住めなくなってしまった土地で、その地域の歴史や住民の方々の声を映像に残すプロジェクトとしておふたりが立ち上げられたのが「中野伝承プロジェクト」です。2018年から「3がつ11にちをわすれないためにセンター（わすれん!）」に参加し、活動をされています。これまで様々なテーマでインタビューを撮影し、今年度までになんと7本もの映像を制作されました。今日皆さんにご覧いただいた『日和山と中野小太鼓編』は、その中で最初に撮影した映像です。

まず、おふたりが所属する「なかの伝承の丘保存会」についてお聞きしたいと思います。「なかの伝承の丘」は中野小学校の跡地につくられたモニュメントですが、保存会はどういった成り立ちで、どのようなメンバーの方が活動されているのでしょうか？

村上：大震災の9日後、2011年3月20日に、和田町内会、西原町内会、蒲生町内会、港町内会という4つの町内会で構成する「中野小学校区災害対策委員会」という組織が発足しました。同年6月には「中野小学校区復興対策委員会」と名前を変え、仙台市や宮城県の担当者の方と一緒に会議などを行ってきました。委員会は2017年の3月に解散したのですが、仙台市が小学校の跡地に立派な慰霊塔をつくってくれたので、その維持管理のために継続して何かしなければということで、同じメンバーで「なかの伝承の丘保存会」を立ち上げました。

佐藤：保存会では普段どのような活動をされているんですか？

村上：第一は、伝承の丘や日和山の除草や草刈り、ゴミ拾いなどです。また毎年3月11日に近い日曜日には、慰霊式も行っています。

佐藤：「なかの伝承の丘」を中野小学校の跡地につくられたのには、どのような思いがあっ

たのでしょうか？

増田：中野小学校区は震災後に災害危険区域に指定され、新しく家を建てて住むことができなくなりました。私たちの帰る場所がなくなってしまったんです。小学校は、地域の人たちにとって一番思い入れのある場所です。毎年学区民運動会では地域の人が集まり、そこでは太鼓の演奏もありましたし、小学校に隣接する西原公園では学区民盆踊り大会が行われていました。そんな小学校がなくなってしまったので、跡地に慰霊塔をつくってもらったんです。その慰霊塔がある場所に「なかの伝承の丘」という名前をつけさせてもらいました。

村上：その慰霊塔は 6.05 メートルの高さでつくられているんですが、これは震災前の、津波で削られる前の蒲生日和山の高さなんですよ（註：現在は標高 3m となり、“日本一低い山”となった）。

佐藤：「なかの伝承の丘」は、元住民の方々が集う場所としてつくられたんですね。その保存会の活動の中で、地域に関するインタビューを映像に残そうと思われたきっかけを教えてください。

村上：きっかけは 2018 年です。メディアテークに天野さんという美人の室長さんがいるんですが、その方が下山さん（註：なかの伝承の丘保存会副会長の下山正夫さん）に、地域の映像を残さないかと声をかけてくれたんです。下山さんは美人に弱いもんですから（笑）、すぐにやろうということになって、それで私はここに連れてこられました。話をしているうちにすぐに頭に浮かんだテーマが、日和山と和太鼓でした。映像を見てもわかるとおり、出演者の 4 名の方は喋り始めたらいつまでも喋っているような人たちなので、絶対にうまくいくだろうと思ってテーマにしたんです。それが最初のきっかけでした。

佐藤：実際に撮影を始めてみてどうでしたか？

村上：それまでビデオ撮影の経験はあまりなかったんですが、わすれん！のスタッフから技術指導をしてもらって、機材の使い方も教えてもらえたので、撮影そのものはそんなに難しくなかったです。

佐藤：撮影そのものはそんなに難しくない、とおっしゃいましたが、何が大変でしたか？

村上：一番大変なのは編集です。この映像も 67 分に仕上げているんですが、実際は 1 時間半くらい撮っているんですよ。ご覧いただいた通り、画面にちょっと頭が映り込んでしまったり、出演者に電話がかかってきて部屋を出たりしたので、そういうのをカットしていっ

て、なるべく会話が繋がるように編集しています。そのあたりは増田さんとふたりで、どこをカットしたらいいか相談しながらやりました。編集に使うのがアドビのプレミアというソフトなんですけど、結構マニアックで難しかったですね。でもやってみてわからなくなったらすぐにメディアテークに来て、福原さんというスタッフの方が技術指導をしてくれたので、だいぶここに通いながらやったと思います。

増田：かつて復興対策委員会のときに、「なかのコミュニティサイト」というウェブサイトをつたりで管理をしていたこともあって、保存会のメンバーから、やってみないかと指名されたんです。最初はメディアテークでカメラの組み立て方などセッティングの指導を受けました。この『日と山と中野小太鼓編』については、いろいろとハプニングがありつつも、まあまあよくできたかなと思ったりしています。映像を撮るだけでなく編集までやるということで、編集用のソフトを私のパソコンにインストールしたんですが、なかなか難しく。村上さんが時々うちに来てやっていたんですけど、最初の頃は大変でしたね。

佐藤：最初は撮影だけして、編集はメディアテークがやってくれるものだと思っていたんですよね。

村上：そうなんです。最初は、撮影だけで終わりかなって思ってたのね。それが編集までやるようになって、いや大変だなあって言って。

佐藤：昨年度までに完成していた映像は1本だけで、残りの6本はまだ撮影素材しかない状態だったものを、今年度編集をして7本すべて完成させましたね。最初は難しいかなと思って見ていたんですが、やっていくうちにどんどんスピードアップされて。せっかくなので、これまでに撮影した7本についてご紹介いただけますか？

村上：1本目は先ほど上映した『日と山と中野小太鼓編』です。その次に撮影したのが『婦人防火クラブ編』で、震災の時に中野小学校に避難した婦人防火クラブの女性陣の活躍のお話を聞きました。3本目は『中野小学校への避難編』で、震災当日に中野小学校に避難した方々をどのように誘導したかなどの体験談をお聞きしたものです。4本目は『西原新聞編』。震災後に西原町内会の女性6名によって発行されたにコミュニティ新聞について、発行のきっかけや苦労話を聞きました。5本目は『なかのコミサイ編』で、さきほどお話しした「なかのコミュニティサイト」略して「なかのコミサイ」というウェブサイトについて、私と増田さんがお話をしています。6本目は『復興対策委員会編』で、委員会のメンバーに活動の反省点や良かった点などを聞いたインタビューです。7本目は、3月11日の大津波で逃げ遅れたものの助かった2名の方にお話を聞いた『3.11 大津波編』です。以上、合わせて7本の映像を制作しました。

佐藤：いろいろなテーマで撮影をしてきたおふたりですが、住民が離散してしまった中で地域の記録を残していくことについて、どのような意義を感じていらっしゃいますか？

村上：毎年3月11日が近くなると、さまざまな被災地の話題がマスコミで取り上げられますけれども、中野地区は157名も亡くなっているのに、あまり取り上げられないんですよね。そういうこともあって、私は何としても中野地区のことを皆さんに伝えたいという思いがあるので、今回つくった映像を、例えば市民センターなどに置いておいて、より身近に見てもらえるような場をつくっていきたいと思っています。

増田：津波で家から何から流されてしまい、災害危険区域に指定されてふるさとがなくなっ
てしまいましたが、でもやっぱりふるさとを思わない人はいないと思うんですよね。映像を見ていただいて、例えば3月11日にはなかの伝承の丘、7月の山開きの時には日和山という帰る場所があることを知ってもらい、そこでみんなとの旧交を温めたりできればいいなと思っています。

佐藤：近くの荒浜小学校は震災遺構として残りましたが、中野小学校は割と早い段階で取り壊しが決まり、地域コミュニティの中心がなくなってしまったので、伝承の丘が新たな拠り所となれば、というお話も以前されていましたね。
制作した映像はどんな方に見てもらいたいですか？

村上：やっぱり、中野に住んでいた方々にはぜひ見てほしいと思っています。そして、なかの伝承の丘保存会という組織もみんな高齢になってきていまして、私自身ももう70歳近いので、次の後継者をどんどん育てていかないといけないなと思っています。高砂神社しかり、和田大明神しかりですね。中野を離れていても、そういった地域に残ったものを保存・継承してくれる人、是非そういう方に見てもらって、賛同してもらえたらいいなと思っていますね。

増田：地元の人たちに見てもらいたいのはもちろんなんですが、防災教育をしている学校などでも見ってもらいたいです。西原町内会の避難誘導の場面や、中野小学校の屋上に避難したあとで津波が押し寄せてくるところ、そういう体験のお話なんかは、津波が襲ってくる映像を見るよりも何だかためになるような気がして。あと『日和山と中野小太鼓編』の映像について言うと、最初に太鼓を習った子どもたちは今40代前半くらいになっていて、就職や結婚で遠くのほうにいる人も多いと思うんですが、そういう人たちにも見てもらえたらいいなと考えていました。

佐藤：ありがとうございます。最後におふたりから何かメッセージなどあれば、お願いします。

村上：来月、これらの映像がわすれん！のDVDとして完成する予定なのですが、メディアテークのスタジオでDVDをダビングして住民の皆さんに配りたいと思っているので、よろしくをお願いします。

増田：私は、この映像制作にあたってご指導いただいたメディアテークのスタッフの皆さん、技術指導をしてくださった福原さん、そして協力してくださった「なかの伝承の丘」の皆さんにお礼を言いたいです。ありがとうございました。

佐藤：こちらこそありがとうございます。ビデオカメラを使ったことがない、映像編集もされたことがない状態から、ご自身で撮影をし、さらに編集もされたおふたりの姿には本当に勇気をもらいましたし、背中を押される思いでした。

村上：最後に一言いいですか。この撮影にあたって、芳賀幸子さんにインタビュアーをお願いして、7本すべて協力していただきました。大感謝しております。どうもありがとうございました。

増田：芳賀さん、ありがとうございました。

(会場から拍手)